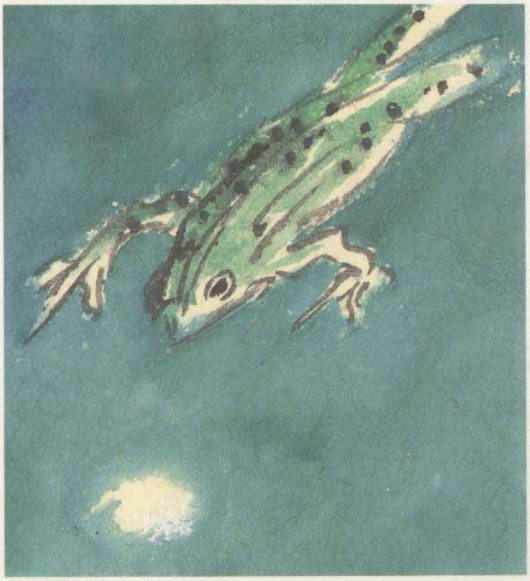
改訂版 長篇童話

ブンナよ、木からおりてこい

水上 勉



若州一滴文庫

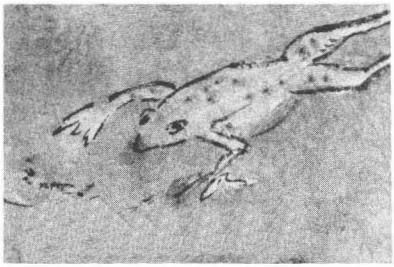
改訂版　長篇童話
ブンナよ、木からおりてこい

昭和六十一年十月十五日　発行
昭和六十三年十月二十五日　四刷

著　者　水上　勉
発行者　くるま椅子劇場設立委員会
発行所　若州一滴文庫
〒919-21 福井県大飯郡大飯町岡田
電話　〇七七〇(七七)一四二四
印　刷　株式会社　販究

© 1988. Tsutomu Mizukami

ブンナよ、木からおりてこい



目次

第一章　ブンナ木にのぼること　5
第二章　ブンナいよいよ冒険をこころみること　25
第三章　雀と百舌がながい後悔のはてにむかし話をすること　65
第四章　ブンナよ、いつでも死ぬ覚悟ができているか　87
第五章　鼠がぐちをもらしたあとでさめざめ泣くこと　111
第六章　月夜に鼠が思案したすえに木からおちること

第七章　へびが美しいことをいったあとで　131
第八章　牛がえるとへびが母をじまんしあうこと　151
第九章　つぐみのうたったうたをもう一ど　179
第十章　ながい冬をブンナが木の上でかんがえたこと　203
第十一章　ブンナよ、大地におりて太陽へさけべ　213
母たちへの一文　225
改訂版　あとがき　229

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

絵

水上勉

第一章　ブンナ木にのぼること

一ぴきのトノサマがえるが、沼の岸にすわって空をみあげていた。北のほうからわたり鳥の群れがやってくる。何百羽ものむれをなして、ピイピイなきさわいでくる。

「トノサマがえるのブンナ、なにをそんなにしんけんにみあげているんだ」

土がえるの仲間がはなしかけた。

「まさか、おまえさん、空をとびたくなったのではあるまいね」

トノサマがえるは、土いろの仲間をふりかえって、

「鳥のように空をとべたら、ひろい世界がみえるだろうな」

とつぶやくようにいいました。

わたり鳥は、みるみるふえてきて、空が黒くそまるほどでした。地上のかえるからみると、それはまったくうらやましいすがたでした。秋もなかばをすぎています。たぶんこの鳥たちは、

北の遠い国から海をわたってきたにちがいありません。ピイピイとさわがしくなきながら、空いちめんをわがもの顔にとんでくる。

トノサマがえるのブンナは、吐息をつきました。

「鳥たちのように、自由に空をとべたらたのしいだろうな。けど、ぼくはかえるだから空をとべないんだ……」

ブンナは町はずれの小だかい台地にある寺の沼で生まれて、そこで大きくなりました。

ブンナのはだはすこし変わっていました。沼のかえる仲間は、「土がえる」とか「沼がえる」とかいって、背なかに土いろのイボがありましたが、ブンナだけ背なかが青くて、腹が白く、黒まだらの点々があって、遠目だと穴のあいた木の葉のようにみえます。みんなから、〈おまえはトノサマがえるの子だぞ〉といわれましたが、ブンナはトノサマということばの意味がながいあいだわかりませんでした。

かえるの仲間にトノサマもケライもなかったことは、あとでわかりますけれども、自分だけからだのいろが、仲間とくらべてかわっていたのは、ちょっといやでした。このことが、ブン

ナのなやみのタネになるのですが、トノサマの意味がわからなかったブンナは、もちろん自分の名の意味についてもわからなかった。

ブンナとはなんてみょうな名だろう。しかしこの名はブンナがおたまじゃくしのころに死んだ父母が、つけてくれた名ですから、しかたありません。ブンナとよばれれば、はいとこたえ、いったい、自分の名にどんな意味があるのか、父母にたずねたくても、もうブンナの父母はこの世にいなかったのです。

めずらしいことではありません。人間の世界にだってあることで、いま、太郎という子に、きみはなぜ太郎という名なのか、ときいても、太郎はかんがえこんでしまうでしょう。太郎にどんな意味があるのか、そのことは父母にきいてみなければわからない。父母が死んでしまっている少年には、たずねることもできない。太郎は太郎であるしかない。ブンナもまた、ブンナであるしかしかたがないとあきらめていました。

土がえるの仲間たちは、

〈おまえさんは、トノサマがえるのブンナだ。ブンナという名のとおりのからだつきだし顔だよ〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

といいました。というのも、じつはブンナは空こそとべませんが、跳躍だけは得意でした。かえるはだいたいとぶことはじょうずですけれど、ブンナは仲間うちでも跳ぶのが得意で、ひまがあると高いところへとびあがれるわざをみがいていました。これには、たいがいの土がえるたちが感心するのでした。

〈おまえは、トノサマがえるだが、雨がえるみたいによく木にのぼれるよ〉

仲間はうらやましそうにいいました。ブンナはたしかに木のぼりは好きで、高いところへのぼると、自分がえらくなった気がしました。地めんの上ではみえない世界をみることができたからです。沼の上に大きな岩がありました。その岩へあがると沼はいくらか小さくみえます。木の上へのぼればさらに沼は小さくなり、庭のむこうにおしょうさまのすんでいるお寺の本堂がみえます。また、それより高い木へのぼれば、本堂の屋根のむこうの町もみえます。ブンナはひまがあると、沼の近くの木によじのぼって、遠いけしきをみました。

木のぼりのじょうずなことは、かえる仲間の身を守るたすけになりました。いちばんこわいのはへびですが、ブンナは、ときどき沼へそのへびがきて、土がえるや沼がえるをおいかけるのをみると、だれよりも先に木にのぼってへびのきたことをしらせました。そして自分はすが

たをかくしました。地めんの上では、へびの方が足がはやいのです。またかえるはなぜかへびににらまれるとすくんでしまうのですぐにたべられてしまいます。木の上だと、枝から枝へうつれるブンナはたくみににげられました。皮膚が青いものですから、木の葉にまぎれ、眼のするどいへびも、あきらめてさるのです。

ブンナは、この特技をじまんにしました。土がえるたちは、ブンナをまねて、木のぼりの練習をしたり、無理な跳躍をしたりしますが、どういうわけか、ブンナの半分もとべないのです。かりに半メートルぐらいのぼれてもすぐ、足がふるえて下へ落ちてしまいます。

ある春の一日のことです。うららかな日和で、沼にはいっぱいおたまじゃくしがおよいでいて、母親たちは、産卵をすませたつかれもあって、沼の葉かげや、石のうらにかくれて、ここちよく陽をあび、うとうとしていました。

ブンナは沼のわきにある太い椎の木を二メートルほどのぼって、そこにできたコブの上までいって、ゆっくり外をながめていましたが、なにげなく空をみたとき、遠くに一羽の鳶がやってくるのをみつけました。ブンナは大声で、地上の仲間にしらせました。土がえるの親たちは、おたまじゃくしに早く水へくぐるようにいい、自分たちもみな穴にかくれたり、土にもぐった

りしました。ブンナは、椎の木のコブのうらに身をひそめました。鳶は沼の上を三回低空飛行しましたが、みんながみえないので、あきらめて、遠くへさりました。ブンナは、この日以来、みんなから尊敬されました。

〈おまえさんは、木のぼりがじょうずなうえに見張り役ではたらいてくれる。これからもみんなにしらせておくれね〉

土がえるの母親たちが涙をためて礼をいったのには閉口しました。しかし、これは気分のよいものでした。ブンナは、春から夏にかけて、いや秋ふかくなるまで、木のぼりの特技を生かして毎日のように見はりをし、外敵をみんなにおしえました。おかげで、寺の沼は平和でした。

ときには、人間の子供がきて、なにもしない土がえるをつかまえて、足をひもでゆわえたりしました。けれども、寺のおしょうさまは、その子供をしかりつけたので、子供はわるいことはしなくなりました。ここのおしょうさまは、沼にいるかえるだけでなく、こいやメダカや、いろいろないきものを大事にします。また、よわいかえるやメダカをねらうへびや鼠を追いちらしてくれますから、外敵の少ない庭でした。ブンナは、よその沼のようにへびにくわれたり、鼠やひきがえるにさらわれたりする仲間をあまりみませんでした。けれども、平和なお寺の庭

にも、別荘をもつへびや鼠はいたのです。

秋がふかまって、いよいよ冬が近づいてきました。ブンナは、あいかわらず、椎の木にのぼっていました。いつものコブのところにいますと、仲間の土がえるが下から、

「ブンナさん、その椎の木のてっぺんまでのぼれるかい」

といいました。

「うん」

とブンナはあおむいてかんがえこみました。椎の木は、子供がかかえきれないぐらいのふとさで、十メートルくらいあります。よくみると先端が折れています。それは、太い木でしたから、下からみると棒のようでした。頂上までいつかのぼってみたいものだとブンナは思っていましたが、いつも気がひるみました。だが、この日急にのぼってみたくなりました。

「よし、これからのぼってやる、よくみておれよ」

とブンナはいって、地べたの仲間がみている中を、ゆっくりとのぼりはじめました。ブンナは、慎重でした。落ちたら、おそらくいのちはありません。ゆっくりゆっくりと足をはこんで

ゆけば、二メートルも、十メートルもかわらない。気をゆるしていなければだいじょうぶだと、いいきかせながらいっしんにのぼりました。

六メートルほどの地点にきたとき、そこに大きな股がありました。ブンナはひと息ついて下をみました。地上の仲間はどこにいるかみえません。沼は小さくなり、石も橋もおもちゃのようでした。土がえるたちのなにかいう声がしますがはっきりきこえません。ブンナは恐怖をおぼえました。頂上までゆこうかゆくまいか。かんがえあぐねていましたが、ひとまずきょうはここで帰ることにしようと心をきめました。そしてゆっくり景色をみました。

寺の本堂のむこうは町でした。坂道に陽があたっています。たんぼにまっすぐな道がのびています。そのまっすぐな道に、自動車が走っています。ブンナは、ああ、あの道を走ってゆくと東京へ着くのだな、と思いました。遠い都につながる白い一本道。ブンナは、それも、沼の上の木の股までのぼったからながめることができたのです。

得意になって、けれど、その気持ちをおさえて、ゆっくり、おりはじめました。そうして、ようやく、地めんにたどりつくと、自分がみてきた町と白い道のはなしをみんなにしました。

夕方でした。大勢の土がえるたちが集まってきて、ブンナの話にききいりました。みんなは、

沼のまわりを家にして、そう遠くまでゆかずに暮らしているのですから、寺のむこうに町があったり、たんぼの中に白い一本道が通っていたり、自動車が走っているときけば、大びっくりです。ブンナは、ますますうれしくなりました。木のぼりのへたな土がえるたちが、一生をそのままで送り、遠い町の風景さえ知らぬままにすごすかと思うと、ちょっぴり気の毒に思え、自分だけみることのできた喜びがふかまったのです。

ブンナは、いつのまにか、木のぼりの特技のために、土がえるたちから尊敬され、同時に、あるときは、仲間はずれにされるようなさびしさも感じました。

しかし、これは、べつに気になりません。みんなは、そう意地わるいわけでもありませんでしたし、年寄りのかえるたちは、ブンナが木から外敵を偵察してくれることがありがたくて、ブンナにいつも感謝していたからです。

〈ブンナよ。おまえさんは、いい子だ。わたしたちは、おまえさんのおかげで、沼で一日じゅう安心して暮らすことができる……おまえさんはほんとに……木のぼりの上手ないい子だ〉

これには少しもお世辞はなかったのです。親たちがそんなものだから、子供のかえるたちも当然、ブンナには一目おいて、ブンナが通ると道をあけたり（よけられなくてもブンナは頭ご

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb